昭和22年5月1日第3種郵便物認可

火の柱

Friends of Jesus 2025年12月第745号

イエスの友五綱領
①イエスにありて敬虔なること
②貧しき者の友となりて労働を愛すること
③世界平和のため努力すること
④純潔なる生活を貴ぶこと
⑤社会奉仕を旨とすること

イエスの友会は、上の五綱領を、生き方の基盤としているキリスト者と賛同者の群れです。(結成1921年10月5日)

テーマ「キリストの僕として」1P「キリストの僕として―新たな使命」金子信一、2P「音楽を通して福音を」星野誠、3P「キリストの僕たち」、「イエスの友会三河支部の再出発と及川健治さんの奨励と証」長谷川勝義、4P「春期聖修会の予定」「会員情報」高島史弘、「会計報告」小野島正彰

キリストの僕として――新たな使命――

金子 信一

2025年6月より御殿場野菊寮の礼拝を担うこととなりました。湯河原から御殿場へ、御殿場駅からはイエスの友会ゆかりの東山荘とは反対方向の富士山へ向かって滝ケ原バス停から徒歩10分。月曜日午後1時半より約30分の40～50名の知的障害者と職員との礼拝です。家庭から離れて暮らしている入所者たちとの礼拝は、とても新鮮で刺激的です。20歳過ぎから70歳くらいまでの75名が入所している知的障害者施設で、幼いときから家庭で過ごしていた時に教会での礼拝の経験を持つ方もいて、礼拝でささげる賛美、聖書のみ言葉、キリストの愛との出会いが、彼らを支えます。

外部の方々との交流が不足している入所者にとって訪問者と共にささげる礼拝、それに続くボランティアの方々との交流、今回来ていただいた星野誠とシモンオーケストラ、日本クリスチャン音楽大学の演奏者との交流は彼らにとってのキリストの愛との出会いで、楽しみとなったようです。

横浜刑務所でのクリスマス礼拝がプロテスタント教誨師の当番で、カトリック司祭と共にささげられます。横浜刑務所の入所者への教誨活動が、個人教誨やグループ教誨、釈放前教育といった時間が設定されていて、入所者の願宣により、宗教へのアプローチが保証されており、希望する宗教の、例えばキリスト教でいうならば、カトリックやプロテスタントそれぞれに希望して教誨師とつながることができます。その働きへと押し出された私は福祉の活動領域から、牧師となって、教誨師とさせていただいています。児童養護施設の入所児童が高齢児となって家庭復帰後しばらくしてから少年犯罪者へと転落して小田原少年院のクリスマス礼拝で再会したのがきっかけで、少年院の教誨師となりました。たまたま、少年院の教誨師枠に空きが生じて、地域の教役者会から推薦してくださいということになり、西湘地区教役者会の会長を担っていた時で、どなたも引き受ける方がおらず、児童福祉施設時代のやり残しの課題が与えられたと思わされ、お引き受けした次第です。小田原少年院の閉鎖に伴って横浜刑務所へとその働きの場と教誨の対象は少年から成人へと移行され、湯河原から横浜まで遠出をしてキリストの愛を伝え続けています。

2025年6月、懲役刑から拘禁刑へと刑法の改正が行われ、懲罰を強いる処遇から、社会復帰を支援する処遇へと切り替えられました。番号で呼ばれていた生活から、本名で呼ばれる生活へ、教誨の在り方も変化が求められているようです。

再犯、再入所しないように教育しなければならなくなったもので、どのような処遇が必要か、悔い改めて、主のもとへ帰れと言う、聖書のみことばが実現するための処遇が必要です。刑務所で出会う一人一人の自己意識がより良いものを持っていたのだと自信を取り戻させる働きが今、教誨師に求められています。失われている魂の復活がテーマです。

れていない人には、この命がないということを伝えています。」

この奨励の後、及川さんは、自らの経験を証しされました。

「それまで、十数年勤めていたスーパーであるとき、転んで怪我をした後、突然、もう明日から来なくていいと言われ、解雇された。失業保険もなくなり、新しい職を探したが、そこで働いている時に、階段から落ちて大怪我をし、何の保証もなくそこも辞めざるを得なかった。こうして、無一文の生活となり、精神的にも追い込まれ、死をさえ考えた。しかし、今一度、信仰者として立ち返って現実に向き合ってこれから出来ることを見つめ直したい」このように語った及川さんの奨励と証しは、確信に満ちていました。

第5回イエスの友会 春期聖修会のご案内

日時：2026年2月23日(月・祝)～24日(火)

場所：第一日目　国際基督教団代々木教会（東京都渋谷区代々木1丁目29—5）TEL03—3370—0571

第二日目　賀川豊彦記念松沢資料館（東京都世田谷区上北沢3丁目8—19）など

綱領　『社会奉仕を旨とすること』

主題聖句　聖書　ヨハネによる福音書15章14節　「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」

テーマ　「誰一人取り残されないために—今、私たちにできること」

①2月23日(月・祝日)　国際基督教団代々木教会

13：30　・開会礼拝　吉本真理さん
司会　大野剛さん

14：00-15：30　・基調講演講師
木下宣世さん(ミッドナイトミッション「望みの門」理事長)
司会　東海林昭雄さん

15：30-16：30　・シンポジウム
司会　東海林昭雄さん
パネラー：木下宣世さん、神山文夫さん、富沢茜さん（子供食堂）、高島史弘さん(路上生活者の支援・サマリア会)

17：00・夕食・弁当

18：00　・路傍伝道（菅野直基さん・有志）　20：00まで

②2月24日(火)

10：00　・松沢資料館見学　（世田谷区上北沢）案内　大野剛さん

11：30　・松沢教会・松沢幼稚園（清藤淳さん）、社会福祉法人雲柱社（小磯さん）　見学、昼食

13：30　・中野総合病院（樋野興夫さん表敬訪問）、

14：00・中野生活協同組合
東海林昭雄さん案内

15：30—16：00
・閉会礼拝　深谷春男さん、
司会　金子信一さん、新宿西教会

・参加費4，000円(資料館入館料，23日夕食24日昼食弁当代を含む)
シンポジウムのみの参加費無料
・申込締切　2026年2月14日（土）
振込入金をもって申込とする。

【二〇二五年会計報告】

《二〇二五年九月以降十一月迄の状況》

◎会費(三千円)一名（長谷川衛）
◎維持費（一万二千円）一名（長谷川衛）
◎登録費（五百円）一名（木村忠雄）
◎感謝献金一名（鈴木貞男）

◆会費納入と献金のお願い◆

尊い献金と会費等でイエスの友会の活動をお支え下さり、イエス様にあって感謝いたします。厳しい折ですが、改めて会費等の納入をよろしくお願いします。

▽たくさんの方から会費や献金をいただきました。感謝します。引き続き、各事業活動の費用のための会費や献金をお願いします。

会費、献金、維持費、購読料等の振込先は、次のとおりです。

▼郵便振替口座　「〇〇一七〇一七一四九五八六」

加入者名　「イエスの友会本部」

いつもご支援を心から感謝申し上げます。（小野島正彰）

会員消息

新入会者

：会員　安間孝明さん　入会日10月11日
推薦者　高島史弘
：会員　土屋和葉さん　入会日11月27日
推薦者　東海林昭雄

「火の柱」第745号
発行人　東海林昭雄
発行所　イエスの友会本部
発行日　2025年12月15日
本部事務局441—8016 愛知県豊橋市弥生町西豊和4-7
高島史弘（イエスの友会　事務局長）
携帯　090-9949-5190メール takashima.m633@japan.email.ne.jp
郵便振替加入者名　イエスの友会本部
口座番号　00170-7-49586
火の柱編集　長谷川勝義
火の柱原稿メール先 biwpc5y8@xj.commufa.jp
〒440-0026　愛知県豊橋市多米西町2-20-12　電話・FAX　0532-61-4822

キリストの僕たち

副会長　長谷川勝義

いつの間にか84歳を迎え、心筋梗塞にもなって、今までのスーパー爺さんが、余命いくばくもない普通の年寄りになったようだ。

しかし、これまでの人生を振り返ると、夜学生の頃、キリスト教を知るようになって、罪の赦しから、自分が解放されて、それ以後、70年近くもこの日本の非キリスト教国にあって、教会とつながり、日曜日には必らず、教会に行き、超党派の朝祷会やイエスの友会にも積極的に参加するようになったのも、何か自分に課せられた神様の意図があると考えられる。

百年を経過したイエスの友会のメンバーとなり、賀川豊彦の強いリーダーシップに導かれた超党派の活動体であるイエスの友会の活動を今も続けているが、賀川豊彦没後50年以上たって、今後どのような活動が出来るのかを考えると、先細り感もあるが、それを乗り越えて、新しい目標を打ち立て日本のキリスト教リバイバルを計らねばならないと思う。

かつては、日本に新島襄、内村鑑三、賀川豊彦など、強い個性をもって、キリスト教を大胆に伝え、聴衆を惹きつけた人物が存在したが、いまや、そういった魅力をもったキリスト者はなかなか見いだせない。どうやったら、キリスト教の良さが人々に伝わるが肝心であるのに、それをないがしろにして、むやみにリバイバルを叫んでも意味はない。

日本の歴史は、神道から始り、仏教、儒教、キリスト教を含めてそれらが混在しながら発展を続けて来た。私は日本のキリスト教を伝えるためには、日本古来からの神道である様々な神社のことや、中国や朝鮮から伝えられた仏教のことをないがしろにすることはできない。

日本人の精神的宗教的な支えとなった多くの人たちがいる。それは、聖徳太子であったり、行基であったり、空海であったり、最澄であったかもしれない。人によってそれぞれ帰依する人、好きな人が違うのは当然である。私なんかは、法然や道元にひかれたりもする。いや、私は親鸞や日蓮が絶対いいという人もいるだろう。

こうして考え見ると、単純にキリスト教だけが絶対であると説得することは容易ではない。このように、この日本にあってキリスト教の福音をわかってもらうのは大変なことだと言える。

今や時代は混とんとし、平和が各地で打ち破られ、武力や権威を振り回す力の時代に後戻りしている。軍事力の時代。そして、一方では、科学の発達により、すべてのことが、物質、原子・量子のミクロ・マクロの世界が明らかにされて、すべてが科学によって説明されようとしている。教会はこれからどのようにものを言えばよいのだろう。

私達は次のように言うしかない。

世の中がたとえどのように乱れているように見えても、全能の父なる神の臨在を疑うことはできない。そして、人間の様々な苦しみの中にあって、それを救い得るのは十字架におかかりになったイエスキリストのみであり、さらに聖なる神の霊が罪深い私たちの助け主として臨在するのである。

聖なる群れが散らされることがあっても、またたとえ壊されても、聖霊の息吹がそこかしこに新たな人や群れを興していくに違いない。聖霊の働きは、そこにも、あそこにも、というように朝祷会の群れやイエスの友会の群れ、福音伝道の群れを作っていくと思う。

私も残された一日一日を神様の御用の為に出来ることをゆっくりゆっくりと歩んでいきたいと思う。

イエスの友会三河支部の再出発と及川健治さんの奨励と証

イエスの友会三河支部例会　及川健治さん

12月1日(月)は、三河支部が岡崎アッセンブリー神召教会で、佐野徳子先生が高齢とご病気等により、引退を決意されたので、岡崎での開催が困難と判断し、豊橋の高島史弘牧師(イエスの友会事務局長)が主宰する豊橋サマリア会付属の福音喫茶を新しい支部例会の会場にできないかと相談し、12月より豊橋で例会を開くこととなった。その最初の例会の奨励にお願いしたのが、イエスの友会の事務局補佐に当たっていた浜松市の及川健治さんだった。

12月1日(月)午後6時半から福音喫茶に9名の方が集まった。多くは、サマリア会に参加している人だが、その他の方もいて、第一部、礼拝、第二部夕食付きの交わりの時をもった。及川さんの奨励と証の概略を以下載せる。

「光あるうちに光の中を歩め」あらすじは、トルストイの書いた短編小説からのもので、舞台は2世紀の古代ローマ帝国皇帝トラヤヌスの時代、キリスト教がまだ禁じられていた時代。豊かな商人の息子ユリウスとその奴隷の息子であったパンフィリウスの物語。パンフィリウスは熱心なキリスト教徒でユリウスを信仰に導こうするが、周りの人たちも妨害する。しかし、ユリウスの妻が病死してから、ユリウスは自分の罪を懺悔し、キリストを信じて受洗した。その後のユリウスは模範的なキリスト者となって、喜びに満ちた人生を送り、彼は、自分の肉体的な死が訪れたのも知らなかったという。(引用聖書個所第一ヨハネ5：11、12)このお話の要点は、神が私達に永遠の命を与えてくださったこと、この命が御子イエスキリストの内にあるということ。御子と結ばれている人にはこの命があり、結ば

昭和22年5月1日第3種郵便物認可

音楽を通して福音を

星野誠（日本クリスチャン音楽大学 学長）

このたび、日本のキリスト教の尊き歴史を継承し、多くの教会を励ましておられる「イエスの友会」会長・東海林昭雄先生より、「証を書いてください」とのお言葉をいただきました。

その瞬間、私は深い戸惑いを覚えました。なぜなら、イエスの友会には長く信仰の道を歩み、豊かな実りを結んでこられた先生方が多くおられます。未熟で小さな者である私が、その方々と並んで証を書くなど、恐れ多いことであると感じ、一度は辞退させていただきました。しかし東海林先生は、「今あなたが主にあって取り組んでいる宣教活動を紹介してみてはどうか」と優しく励ましてくださり、その御心に従いたいと思い、こうして筆を執らせていただくこととなりました。

私は三代目のクリスチャンとして生まれ、幼い頃から教会の中で育ちました。しかし二十七歳に至るまで、信仰はどこか受け身で、礼拝に通い続けてはいても、心の中心に主を据えて歩むという決心には至っていませんでした。教会を「習慣として訪れる」だけの信仰であったと言ってもよいかもしれません。神様の恵みを知りながらも、主の弟子として生きる強い覚悟は持ち合わせていなかったのです。

そのような私が変えられたのは、二十七歳の時、聖霊の深い導きを経験したことがきっかけでした。主の前に静まっていたある日のこと、「あなたは主イエスの弟子として生きなさい」という力強くも優しい促しが、心の奥深くに響きました。それは言葉にならない確かな導きであり、生涯忘れ得ぬ恵みの瞬間でした。その時初めて、私は自らの人生を主の御手に委ね、イエス・キリストに従う者として生きる決心をいたしました。

私は音楽を専門として歩んでまいりました。主から与えられたこの賜物をもって、神様に最も美しい賛美をささげたい。そして音楽を通して、日本と世界に福音を届けるためにお仕えしたい。また主イエス・キリストが世を愛され、世の救いのために歩まれたように、私も小さな者ではありますが、主の弟子として世のために少しでも役に立ちたい——そう強く願うようになりました。

その思いを胸に、私は1992年より、東京シモンコーラスと東京シモンシンフォニーオーケストラの働きを開始しました。後には日本クリスチャン音楽大学の設立にも関わり、さらにNPO World Youth Orchestraを通して、より広いフィールドで音楽による奉仕の道が開かれていきました。今日まで続いているこれらの働きは、ただ神様の恵みであり、イエスの友会をはじめ、各教会、宣教団体、そして祈りと献身をもって支えてくださる多くの兄弟姉妹のお祈りと協力によって支えられています。心から感謝申し上げるとともに、すべての栄光を主にお返しいたします。

私たちの使命は、「最も美しい賛美で主をあがめること」、そして「音楽を通して日本と世界の宣教に仕えること」です。この使命が具体的な形となり、日本国内では数多くの奉仕活動が広がっていきました。東日本大震災の被災地支援コンサート、仮設住宅での訪問演奏と交流会、老人ホームでの慰問コンサート、少年刑務所での演奏奉仕、社会福祉センター・孤児院でのコンサートなど、音楽が多くの方々の心に慰めや励ましを届けることができるよう願いながら活動してまいりました。

さらに海外では、韓国、ネパール、タイ、バングラデシュ、カンボジアなど、アジアの多くの国々を訪れ、学校や福祉施設でコンサートを行ってきました。特に楽器のない地域の子どもたちに対しては、楽器を寄付し、奏でる喜びを分かち合う活動を続けています。子どもたちが初めて楽器を手にし、戸惑いながらも音を出し、やがて笑顔を見せるその瞬間は、主の愛がその場に満ちる特別な恵みの時です。

私は、主が導いてくださった道を振り返るたびに、ただ感謝の思いが溢れてきます。主は常に最善の時に、最善の道を開いてくださるお方です。これからも、主の愛と福音が一人でも多くの方に届くように、音楽を通して小さくとも忠実に仕え、主が用いてくださる器でありたいと切に願っています。